

オープンサイエンスの深化と推進に関する検討委員会
(第 24 期・第 10 回)

議事録

1. 日時 令和元年 10 月 31 日 (水) 17:30-20:00

2. 会場 日本学術会議 6 階 6-C (1) 大会議室

出席者(五十音順、敬称略): 安達 淳、高木利久 (リモート参加)、喜連川 優、
澁澤 栄、林 和弘、引原 隆士、村山 泰啓

オブザーバ参加: 山極壽一 (日本学術会議会長)、小林良彰 (日本学術会議連
携会員、慶應義塾大学法学部教授)

3. 議題

1. 前回議事録確認
2. 情報提供 1 (山極先生)
3. 情報提供 2 (小林先生)
4. その他

4. 配布資料

資料 1 第 9 回議事録案

資料 2 社会科学におけるデータ・アーカイブの構築 (小林先生)

追加資料 1~4 提言案

議事

1. (議事録確認) 第 9 回の議事録案を承認した。参加者の都合により、小林先生からの情報提供をまず行うこととした。
2. (小林先生報告) 小林先生から、資料 2 に基づき日本の社会科学、特に政治学研究におけるデータ・アーカイブに関しての状況報告があった。主な点は以下の通り:
 - 社会科学では論文のおよそ 7 割がデータ分析に基づくものであり、データの重要性は高まっている。
 - 研究に使ったデータの散逸が懸念され、また、自治体等でも合併等により保存が十分ではない。社会科学の共同利用機関もなく、我が国ではデータの保存や公開が諸外国に比べて不十分で、日本を対象とした研究にも支障が出ている。
 - 今まで多言語検索可能な社会科学データベースシステムを構築してきたが、国際的な研究協力を進める上でも研究データのアーカイブ化と公開が重要である。
3. (山極先生報告) 山極会長から、本検討委員会で取りまとめる内容についての説明があった。主な意見等は以下の通り:

- 動物学では観察記録が人手による記録から電子的な形態に大きく変化し、ビデオ付きの論文も増えてきた。統計的に扱えるほどデータがなくケーススタディで生態や現象を調べることも多い。
 - 物理や化学と異なり、生態系では性質や多様性を測ることが難しく、一度破壊すると復元が難しいし、再現できないことも多い。モデル化や行動の類型化を通して、理解していくことになる。
 - 大学はオープンな場であり、原則的には成果は公開すべきものである。論文の出版とオープン化も進めるべきである。理工系と人文社会系では、論文かあるいは著書か、また英語で出版するかなどのやり方が学問分野毎に異なるが、グローバルに日本からの成果を発信する重要性は同様である。
4. （その他） 引原副委員長から、追加資料として細野先生、上村先生、赤池氏、引原委員の担当部分をまとめたものが紹介され、今後の取りまとめ方針について意見交換した。次回の開催日時は調整して決定することとなった。

以上